

自主参加型実習「TEIKA 自然合宿」の実施概要および参加学生の意識調査に関する報告

¹ 篠原正典 ¹ 下岡ゆき子 ¹ 岩瀬剛二 ¹ 渡邊浩一郎 ¹ 橋本慎治 ¹ 落合鐘一

¹ 帝京科学大学生命環境学部自然環境学科

Report on the extracurricular practical trainings in 2011 and the results of questionnaires on the participants.

¹ Masanori SHINOHARA ¹ Yukiko SHIMOOKA ¹ Koji IWASE ¹ Koichiro WATANABE
¹ Shinji HASHIMOTO ¹ Shoichi OCHIAI

Key word : 野外実習、合宿、新入生の導入

1. はじめに

本学生命環境学部自然環境学科(以下、本学科)は、化学や生物などの学問分野を基礎として幅広く環境科学や自然環境に関して学ぶ学際的な学科であるが、入学間もない1,2年生は基礎的講義や一般教養的講義が多く、4年間での学びの全体像を描きづらく、入学当初の高い学習意欲を低下させてしまわないか、危惧されている。これらを踏まえ、本学科では、学内競争獲得研究費である教育推進特別研究費を利用することで、2009年度より2カ年連続で、正規カリキュラムとは別に、導入的で楽しみながら自然環境を幅広く学べる実習「TEIKA 自然学校」プログラムを企画・実施してきた¹⁾。幸いにも2011年度も同研究費を獲得でき、これまで1日のプログラムを年間通じて7,8回行っていた「TEIKA 自然学校」を半減(3回)させ、南アルプス山麓の自然公園において、テントや

バンガローによる合宿をともなう実習「TEIKA 自然合宿」を創設し実施した。本報告はその実施概要を報告するものである。尚、例年同様実施した「TEIKA 自然学校」に関する報告は割愛する。

2. 目標と全体概要

2011年度は、主に1年生を対象とすることとし、学習意欲の向上やキャンパス間の交流などを意識し、以下の三つの成果目標を掲げた。

- ・好奇心・学習意欲の喚起をはかる
- ・普段から自然に目を向ける習慣のきっかけを与える
- ・学生間、および、教員 = 学生間のコミュニケーションに慣れてもらう

そして、これらを達成するために、さらに以下の三つの具体的な活動目標(行為目標)を設け、合宿

表 1. 全体プログラムの概要と参加者数

開催月日	タイトル・内容	講師	開催地・形式	参加者数(人)
9/13 - 15	南アルプス森の学校・自然公園での合宿(内容の詳細は表2を参照)	大西信正、村井孝一、菊池早苗、	山梨県南巨摩郡早川町・野外実習	44
10/3	「動物を描く」・イラストの意義および動物イラストの描き方を学ぶ	河合義晴(イラストレーター)	上野原キャンパス 本学科実験室・講義	20+
10/30	「動物を描く」・イラストの意義および動物イラストの描き方を学ぶ	河合義晴(イラストレーター)	千住キャンパス 本学科実験室・講義	40+
12/03	「樹木を観る、自然の豊かさをみる」・高尾山の自然を楽しみ森林生態を学ぶ	高尾山ビジターセンター・自然ガイド	高尾山・野外実習	18

プログラムを検討した。

- ・野外で協同作業に取り組む
- ・外部講師実習による幅広い話題を提供する
- ・異なるキャンパスの学生間の交流を図る（本学科は1,2年生が二つのキャンパスに分かれている）

これらの目標に加え、過去2年の自然学校の実績・参加状況を考慮し、表1にまとめる全体プログラムを設計した。

新しく創設した合宿形式のTEIKA自然合宿(以下、合宿)は、1年生のみの参加とし、夏休みを利用し南アルプス邑・野鳥公園(山梨県南巨摩郡早川町)へと出向き、表2に示す13のイベントを含む二泊三日の合宿とした。また、具体的なイメージをもたせやすくするため「南アルプス 森の学校」と副題をつけた。

事後のレポート提出は課さないこと、単位修得とは無関係な実習であること、さらに、実習後に無記名のアンケートを依頼することを参加候補学生には事前に知らせた。引率は著者らを中心とした6名の本学科教員とTA3名が行い、現地でも3名の外部講師の協力を仰いだ。

3. 参加の実態

1年生を対象としたTEIKA自然合宿には本学科1年生107名中44名(上野原学生12名、千住学生32名)が、3回開催したTEIKA自然学校には約80名(他学科生、父兄、学科外教員を含む)が参加した。多少の時刻のずれなどはあったが、天候にも恵まれ、全てのプログラムは計画どおりに実施さ

表2. TEIKA自然合宿「南アルプス 森の学校」スケジュール。プログラム中のプロジェクトワイルドとは、米国で開発された「自然や環境のために行動できる人」の育成を目指した野生生物を題材とした環境教育プログラム。

月 日	移動・実習内容・宿泊
9月13日(火)	09時40分集合。上野原キャンパス駐車場。JR八王子駅南口。 10時00分出発。車中で各自昼食。 13時30分、南アルプス邑・野鳥公園着。荷物の整理、テントの設営 ①アイスブレイカー ②シカのフィールドサインを学ぶ(園内散策・施設紹介と併せて) ③赤外線センサーカメラの説明と設置 16時30分、入浴・就寝準備・自由時間。 18時00分、夕食 ④早川の自然・シカの行動と生態のミニレクチャー 20時00分、入浴・就寝。
9月14日(水)	06時起床。朝食・自由時間。 ⑤早朝の野鳥観察 09時00分 ⑥植生調査法を学ぶ ⑦様々なキノコの観察・採取 11時30分、昼食、自由時間。 13時00分 ⑨プロジェクト・ワイルド(生き物の繋がりを学ぶゲーム) ⑩赤外線センサーカメラの確認・再設置 16時30分、入浴・就寝準備・自由時間。 18時00分、夕食 ⑪コウモリ観察 20時00分、入浴・就寝。
9月15日(木)	06時起床。朝食・自由時間。 ⑫センサーカメラのデータ確認 09時00分 ⑬水質調査方法 ⑭水生生物の採集と観察 11時30分、昼食、片付け、まとめと振り返り。 13時00分、野鳥公園発 16時30分、集合場所と同じ場所にて解散。



図1. 合宿地の南アルプス邑野鳥公園に到着後、すぐにテントの組み立てを始めた。組み立て説明図を見ながら、班メンバーとの初の協同作業。



図2. シカ研究者である大西信正外部講師より、野鳥公園内の展示物を用いて指導を受ける。



図3. プロジェクトワイルド・ファシリテーターである村井孝一外部講師より、ロールプレイングで生物同士の繋がりを学ぶプログラムの指導を受ける。

れた。これにより、目標の二つ、「外部講師実習による幅広い話題を提供する」と「野外で協同作業に取り組む」が達成された（図1～3）。

4. アンケート調査の結果と目標の達成度

合宿終了後、ある程度の学生生活を経ての生活や修学の様子を調査するために、およそ半年ほど経ってから11の質問からなるアンケートを行い、約半数の24名からの解答を得た。いずれの質問も「はい、いいえ、どちらでもない」の三択で解答を依頼した。「好奇心・学習意欲の喚起をはかる」に関連すると思われる3つの質問、「楽しめましたか」、「学生生活の充実につながりましたか」、「学校では学べない内容でしたか」には、それぞれ「はい」が100%、92%、100%であり、9割から全員が肯定的返答であり、目標は達成された。

また、「普段から自然に目を向ける習慣のきっかけを与える」に関連した質問「自然について興味は高まりましたか」は肯定92%であり、「学生間、および、教員＝学生間のコミュニケーションに慣れてもらおう」に関連した質問「友達は増えましたか」は肯定88%であった。学生たちが、自然をたのしみ、学生間で交流する様子なども直接観ることができ、これらの目標も達成されたと言える。

ダブルキャンパスという本学科特有の事情から設定した目標「異なるキャンパスの学生間の交流を図る」に関連して、「他キャンパスに友達はできましたか」という質問をしたが、肯定71%と他の質問への肯定と比べやや少なく、「その他キャンパスの友達と今も連絡をとっていますか」は肯定25%とかなり少なくなっていた。しかし、本合宿がなければいずれも0であったことを考えれば、大きな成果であったと言える。

尚、その他に次のような質問を行った（カッコ内の数値は肯定の割合）。「次回も開催される場合、後輩に参加を勧めますか（96%）」、「単位取得にはつながりましたか（17%）」、「食事には満足しましたか（67%）」、「二泊三日という長さは適切でしたか（83%）」。「これらも今後の実習立案の参考としていく予定である。

5. まとめと今後の課題

直接の情報収集やアンケートなどから、学習意欲の向上やキャンパス間の交流などを意識した目標は全て達せられたと考える。本合宿の参加者からは1名の退学者がでたが、これは経済的理由による退学であり、その他の学生43名は実習後1年以上が経った今も意欲的に就学を続けている（2013年1月現在）。

今後の課題としては、自由参加の実習であるため参加が学生の主体性に任され、積極性に乏しい学生を参加させることが困難であること、3日に及ぶ実習であったため学校行事などとの兼ね合いで開催時期の調整が難しかったこと、調査結果を比較検討する対象データの取得が困難なことなどが挙げられた。

2012年度も再度合宿形式の実習を試み、現在、その成果や反省点を検討中である。今後も、学生たちの実状や希望に配慮しながら、一層、大学教育の促進につながる事業を企画・提供していきたい。

6. 謝辞

本自然学校を開催するにあたり、ご多忙な中ご指導をいただいた講師の方々、準備や講師補佐にあたってくれた学生諸氏に深謝する。本自然合宿・学校は平成23年度の教育推進特別研究費の助成を得て実施した。

7. 引用文献

- 1) 篠原正典、下岡ゆき子、岩瀬剛二、渡邊浩一郎、橋本慎治：自主参加型実習「うえのはら自然合宿」および「TEIKA 自然学校」の実施概要および参加学生の意識調査に関する報告．帝京科学大学紀要 8, 189-191, 2012.